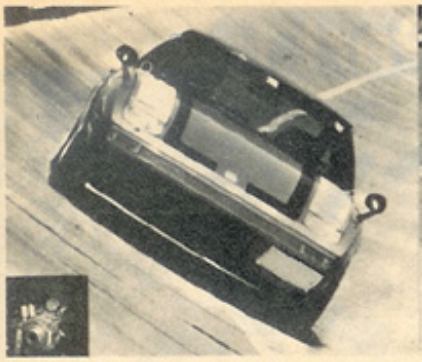
これ以上の記録となると、我がオートマキシマム読者にもなじみの深いアマさんこと、RE雨宮自動車のひとり舞台といってもいいくらいの活躍ぶりで、マキシマムスピードの数字を塗りかえていった。

当時のRE雨宮といえば、ストリートのゼロヨンや、高速道路ではかなりの速さを誇っていた。

ひとつめの記録は、253・853km/h HKSの2T-Gターボの速度を10km/h以上も上回わるものだった。

クルマは、サバンナRX-7、赤のボディには、黄色と黒のストライプが入れられ、エンジンは、13Bのペリフェラルポートに改造されていた。今でこそ、ペリといえば、あの独特のカン高いエキゾーストノートは知られているが、当時はまれで、



277.45km/hの雨宮RX-7。快進撃中の頃

258.06km/hを記録した雨宮RX-7

この日、谷田部にいた人達は、このペリサウンドに圧倒されたものだった。

253km/hの記録は長くはなかった。数ヶ月のうちに、258・06km/hが出たのだ、これが、RE雨宮の2つめである。

と、ここまでの記録は、メカチューンによるもので、これ以後、谷田部のマキシマムスピードのトライアルにおいては、ターボが主役となる。2本のストレートを持つオーバルなコースは、バンク内での速度は抵抗によりある程度ロスされるし、コーナーと同じことなので、バンク内のスピードもべらぼうに速くは出来ない。こういった条件からいくと、パワー&トルクを一気に出せるターボの方が、バンク内でスピードが上がらなくても、ストレートに出てから加速することでスピードは十分に引き出せるからだ。

このターボをドッキングしたロータリー13Bサイドポートターボが、277・45km/hをマークした。もちろRE雨宮自動車のRX-7、これが3つめ。

ツインターボ化により、途端に10km/hアップ。REパワーを知らしめた

277・45km/hを樹立したのは1981年11月7日、それから10ヶ月後の1982年9月11日、RE雨宮自動車の4つめが出た。10km/h以上速い288・00km/hがそれ。エンジンは、13Bのロータリーにタービンを2個つけたツインターボ。クルマは、イエローのRX-7。

絶対と思われたこの記録もたった2ヶ月のうちに塗りかえられてしまった。11月の早朝で今にも雨が降り出しそうな中での、RSヤマモトチューンのS130フェアレディZ。エンジンは3リッターのフルチューンにツインのタービンで、298・01km/hという、ナンバー付のクルマでは、考えようもない記録だった。

↑当分破られることはないと思われた288.00km/hだったが……

国産車以外でのマキシマムスピードとなると、古くは、2リッターのレーシングスポーツのローラT212やF2マシンも走ったし、ル・マン24時間レースに参加するためにつくられたドームが314・52km/hで走ったし、外車では、パンテーラスペシャルの307・69km/hというのがある。

↑本命視されていたRSヤマモトZ

谷田部のコースにおいてのナンバー1は、グループCマシンのフェアレディZCが出した319km/hが、我々の知るかぎりのトップである。

話を国産チューニングカーにもどそう。300km/hというバカッ速いスピードを目前にして、各チューナー達は眼の色を変え、大台にチャレンジしていった。最高速実績ナンバー1のRE雨宮自動車は、293・87km/hへと、そして、トヨタの5M-Gをツインターボ化したトラストのセリカXXが292・20km/hへとマキシマムスピードを引き上げていったが、この間、マイナーなトラブルのため記録の伸びは決して順調ではなかった。

国産車として、初めて300km/hの大台をオーバーしたのは、あのHKSで301・25km/hという速度だけど、内外ともストリートとは大分違うもの。

ストリートカーが300km/hを越えたのは、前にも書いたとおり1984年12月21日。トライアルのZはTバールーフを持ち、トラストのソアラは、フルコンポ、本革張りのシート、RSヤマモトのZもまたコンポといった具合に、まさに日常の足としてつかっているクルマ達だ。

それにしても、トライアルZのたたき出した307・955km/hは、本当に凄いものだが、当初、ナンバー1は、最高速御三家ともいえるRSヤマモト、RE雨宮、トラストのいずれかが実現してくれると誰もが思っていたにちがいない。それが、いわばダークホース的なトライアルがたたき出したことによって、御三家は、今以上に発奮するにちがいない、チューニングカーの最高速へのトライアルは、これで終ったのではなく、300という、ひとつの区切りがついたことによって、新らたなるスタートラインについたともいえ、今後、また熱い男達の闘いがくり広げられる、次の記録は何km/h?。

↑RE雨宮・雨宮勇美氏

↑トラスト・大川光一氏

↑RSヤマモト・山本豊史氏